

# 郷土芸能を通じた学校の取り組みに関する研究

山 崎 瞳

## 〔抄 録〕

富山県五箇山地方では戦後間もない頃から民謡を学校教育のなかに取り入れてきた。独自性の強い民謡を学校に取り入れることで、子どもたちに郷土愛や民謡のよさを知ってもらうことがその主たる目的であった。現在では、子どもたちは小学校・中学校・高等学校と、どの学校教育段階であっても民謡について、地域の保存会や教員から教わる仕組みが確立されている。それは、地域社会と学校教育が連携できているといえるだろう。しかし、学校教育のなかで民謡を取り入れることで、子どもたちのなかで民謡とは「学校で強制的にやらされるもの」といった意識をもたせているのではないだろうか。

結果として、民謡に対して積極的に学習する子どもと、民謡に対して「やらされている」「他のみんながやっているから」といった消極的な子どもといったように二極化しており、子どもたちの民謡に対する意識は必ずしも向上しているとはいえないことがわかった。

キーワード 民謡、学校教育、強制、地域社会

## I. 学校教育と地域社会

小・中学校で2002年に、高校では2003年に総合的な学習の時間や学校完全5日制などが含まれた新学習指導要領が施行され、約2年が経過しようとしている。近年の地方分権化の流れを受け、新学習指導要領では学校や校長の裁量権が以前より拡大し、画一的な教育から地域や学校の事情に即した教育へと変化してきている。このような流れのなかで、学校と地域社会との連携は不可欠なものになりつつある。佐藤学(2000)は学校と地域社会が学びの共同体を形成することで、子どもたちの学習意欲が向上すると述べている。<sup>(1)</sup> また、新学習指導要領で創設された総合的な学習の時間は、地域の人材を積極的に活用し、地域社会と学校の交流を促進することを目的の1つとしている。このように、教育政策として学校と地域との連携が叫ばれるなか、五箇山地方においては、戦後間もない頃から、民謡を学校教育のなかに取り入れることによって、学校と地域とが一体となって教育にとりこんでいる。民謡を学校教育に取り入れた当初は、遊びやレクリエーションとしての民謡といった傾向が強かったが、現在では、学校教育の多くの時間で民謡を題

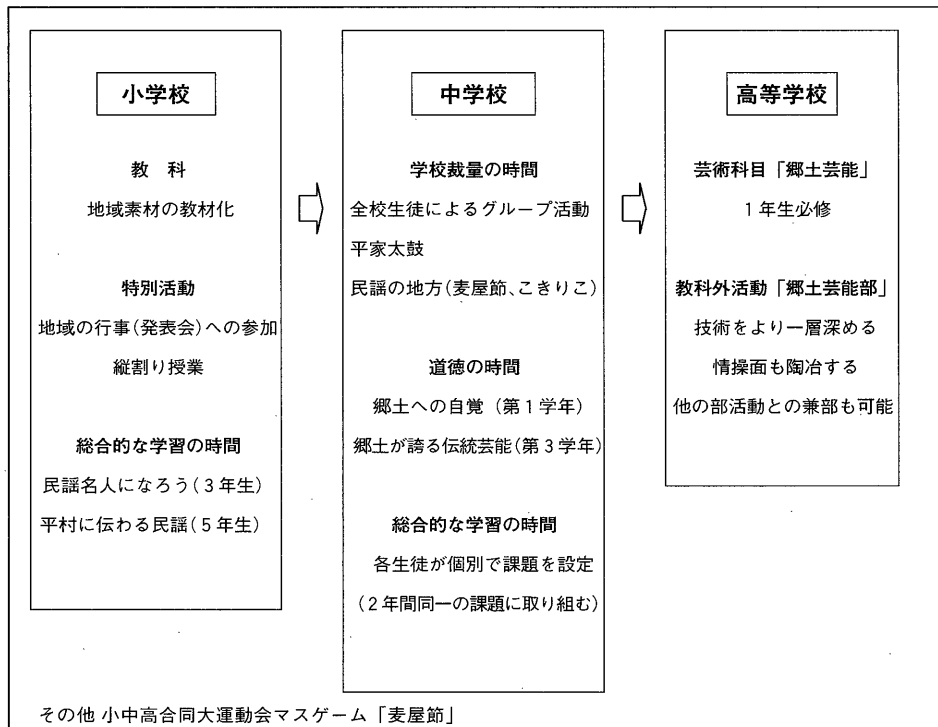
材に取り上げ、郷土や民謡を学習する、といった学校全体での取り組みが進んでいる。したがって、この学校と地域のあり方は、地域との連携があまり進んでいない多くの学校のモデルとなりえると考えられる。

しかし、学校と地域社会が連携する一方で、学習者である子どもたちのなかに、学校で教えられる民謡に対して否定的な感情をもつ子が出てきているのではないだろうか。本来ならば地域や世帯の伝達されていた民謡を学校教育のなかで取り入れることにより、「強制的やらされている」といった意識をもつ子どもがいるのではないだろうか。本研究では、「民謡を学校で強制的に学習することで、民謡に対して否定的な意識をもつ子どもがでてくるのではないだろうか」を仮説に設定し、現地でのフィールドワークを通してこれら进行分析することを目的とする。

## Ⅱ. 民謡を用いた学習の事例

まず、この地方でおこなわれている民謡を用いた学習について紹介したい。次の表は民謡を題材とした学習の流れを図式化したものである(表1-1参照)。

表1-1 学校教育における民謡を用いた学習の流れ



小学生から高校生まで全員で踊る

男子は笠踊り

女子は手踊り

出所 平成12・13年度文部科学省指定道徳教育体験活動推進事業  
 <伝統文化教育>研究のまとめ(2002)より作成

子どもたちは、この地方の学校に行くことで民謡とかかわる機会が増加する。小学校では、地域の人に話を聞いたり、楽器を触ったりといった初歩的なものに限定されているが、中学校になると1つの踊りに唄や踊り、楽器をすべて合わせた高度なものになり、民謡に対する誇りをもつような学習となる。高校では、科目として「郷土芸能」が取り上げられ、1年生の必修になり、郷土芸能部という部活動となって地元での発表会だけでなく、県外へも踊りを披露する機会が出てくるのである。また、地域の民謡保存会との連携も活発に図られており、とくに、高度な民謡を踊る中学や高校においては、地域の保存会が指導することが多くなる。

このように、子どもたちが民謡を学校教育で学ぶようになった理由としては以下のことが考えられる。

1つ目は、少子化の進行である。この地方は日本全体や富山県に比べて、急速に少子化が進行した(図1-1参照)。

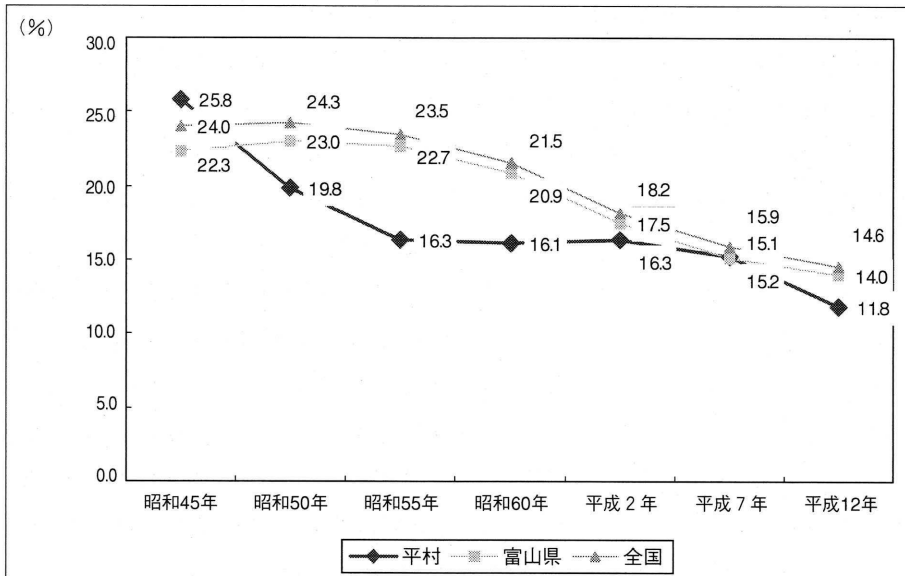


図1-1 各地方における15歳未満の対全人口比率の推移

出所 厚生統計要覧 ([http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/youran/indexyk\\_1\\_1.html](http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/youran/indexyk_1_1.html))

富山県人口移動調査 (<http://www.pref.toyama.jp/sections/1015/lib/jinko/>)

および平村村勢要覧資料編(2002)より作成

これを見ると、昭和40年代後半から平成2年頃まで、平村は他のどの地域よりも急速に少子化が進行していたことがわかる。一時、少子化の流れは停滞していたが、近年になって再び進行しており、子どもたちの数は減ってきているといえるだろう。これらにより、民謡を担う子どもの絶対数が不足し、1人の子どもが複数の楽器や踊りをする必要がでてきたのである。それまで世帯や地域で伝達してきた民謡は基本的に1つであるため、それでは、廃れてしまう民謡も出てくる。したがって、学校で民謡を教えれば、子どもたちに複数の踊りや楽器を教える時間や人材が確保しやすいと考えられたのである。

2つめに、民謡を通じて、自分たちの郷土に対する愛着をもって欲しい、という地域住民や教員の意識が強いことが上げられる。こきりこぶしや麦屋節などはこの地方独特の民謡であり、日本民謡のなかでも最も古い歴史をもつといわれている。<sup>(2)</sup> そのような民謡を子どもたちが身につけることによって自分たちの出身地に誇りをもってほしい、この地域のよさをわかってほしい、という地域住民の声から学校教育に民謡が取り入れられたのである。

このように、平村においては学校と地域の連携によって民謡を学ぶ仕組みが確立されているといえるだろう。学校と各保存会の連携は密であり、年間指導計画を作成し、研究会をおこなうにあたって、保存会の人間が多くの場合、参加している。地域住民は学校へ入り込むことが非常に容易になっているのである。地域分権にともなう学校教育の理想を、この地方では民謡という題材を用いることによって可能にしているといえる。学校と地域の間に精神的な壁がなく、家庭・地域・学校の三者が協力して子どもたちの学習にかかわっているのである。このように地域と学校が連携を図っている場合、子どもたちの学習意欲は向上するといわれている。学校でおこなわれていることが地域や家庭に見えやすいため、子どもたちは学校での成果に対して、教員だけでなく地域や家族の評価も受けることができるためである。実際に、平村においても、民謡の祭りが毎年おこなわれ、地域社会に学習成果を披露することができる機会を数多く設けている。

それでは、民謡を用いた学習は、実際に子どもたちの民謡に対する学習意欲を向上させているのだろうか。これまでの研究で、この地域の伝統芸能のひとつである「笠踊り」が学校教育に取り入れられた昭和28年前後で、伝統芸能の伝承に対する意識が二極化することが明らかとなっている。<sup>(3)</sup> 原清治(2003)によると、教育のもつ本質的な機能を論じる場合、二つの概念を用いる場合が多く、ひとつは「文化の伝達」であり、もうひとつは「文化の内面化」であると述べている。<sup>(4)</sup> 高齢者の民謡伝承に対する意識の二極化が「文化の伝達」に対する影響であるならば、「文化の内面化」に対する影響として、子どもたちの民謡に対する考え方が変化しているのではないかと考えられる。子どもたちは民謡に対して、地域住民や保存会、教員などが考えているそれと違った考えをもっているのではないだろうか。

仮説として「平村の子どもたちは、教員や地域住民が望む民謡の考え方をもっていないのではないかと設定し、現地でインタビューを実施し、子どもたちの民謡に対する意識を実証的に考察したいと思う。

### Ⅲ. インタビュー調査の概要および分析結果

#### 1. 調査の概要

今回の調査でインタビューをおこなった調査概要および属性は以下のとおりである(表1-2参照)。

調査場所：富山県東砺波郡平村および上平村

調査期間：2003年 9月10日（水）～2003年 9月11日（木）の 2日間

調査方法：インタビュー調査

表 1－2 インタビュー対象者の属性

氏名	年 齢	性 別	職 業	備 考
A	40代後半	男性	中学校教員、平村へは赴任 4 年目であり、教員のなかでは長く在籍している	
B	60代前半	男性	学校管理職、学校に民謡が導入された経緯をよく知っている	
C	60歳	女性	地域保存会所属、店を営みながら個別で民謡に対しての学習もしている	
D	14歳	男性	中学校生徒、平家太鼓で太鼓のパートを練習していた	
E	14歳	女性	中学校生徒、手踊りのパートを練習していた	
F	15歳	女性	中学校生徒、進学は地元ではない高校を希望している	
G	18歳	女性	高校生徒、郷土芸能部に所属し、民謡に対しての学習意欲が高い	

## 2. 事例の分析

それでは、今回の調査のなかから、学校でおこなわれている民謡に対してかかわりの深い人物を取り出した。

最初に、この地域の教員に対して民謡が学校教育に取り入れられた経緯やその背景、今の子どもたちは民謡に対してどのような行動をしているのかについて面接をおこなった。

### 【事例 1 Aさん 40代後半 男性 教員】

質 問：それでは、民謡が学校教育を通じておこなわれるようになった経緯を教えてください。

Aさん：はい、このような活動をおこなうことになったのは地域の保存会の方から中学に要請されたから①です。「私たちが指導するので、学校で民謡を教えたい」ということでした。こちらの側も将来にやらないといけない総合学習で「伝統の継承をしたい」と思っていたので、ちょうどいいと思い、始めました。

質 問：それはいつ頃のお話ですか。

Aさん：確か5・6年前からだった②と聞いています。

質 問：学校外の時間にも民謡の練習はおこなっているのですか。

Aさん：はい、毎週火曜日は体育館で夜に練習します。

質 問：その時間は子どもたちを強制的に集めているのですか。

Aさん：はい、そうなります③。

質 問：子どもたちは民謡に対してどんな風に取り組んでいますか。

Aさん：3年は真面目に取り組んでいると思いますよ。ただ、1・2年は少し飽きはじめてい

子もいますね。今の2年から学校で民謡が本格的に取り組まれた<sup>④</sup>と聞きましたから、何か、燃え尽きている感じがしますね。

【事例2 Bさん 60代前半 男性 教員】

質 問：郷土芸能を学校でおこなうようになったのはなぜですか。

Bさん：やはり、子どもたちの数が減ってきている<sup>⑤</sup>というのが大きいでしょうか。以前のように1人が1つの踊りを踊るだけでは成り立たなくなってしまったので、いくつかの踊りを重複したり、いくつかの楽器を弾けるようにならなくてはいけなくなったりしたからだと思います。

質 問：地域の保存会と連携するようになったのはなぜでしょうか。

Bさん：ここは富山のなかでもへき地にあたりますので、教師は3～4年で転任してしまいます。また、必ずしも五箇山の出身の先生がこちらに赴任されるかどうかはわかりません。保存会の方はこのあたりの出身の方が多いですし、やはり民謡に詳しい方が指導されるほうが良いと考えたからです。

質 問：保存会の方はボランティアで生徒を教えているのですか。

Bさん：基本的には特別非常勤講師としてこちらにきてほしいのですが、認められないこともあるので、保存会の方に甘えてしまう現状<sup>⑥</sup>はありますね。

教員の話では、下線部①や⑥のように、この授業の主体者が学校側ではなく保存会にあることがうかがえる。教員のインタビューは放課後の練習時におこなったが、この教員は練習に参加することも指導することもなく、生徒の付き添いとして来ていた。また、他にも生徒とともに楽器の練習をおこない、保存会の方に指導を受けている教員も見受けられた。また、下線部②や④から、この民謡を題材にした授業は比較的新しくおこなわれていたことがわかる。これは、遊びやレクリエーションとしての民謡ではなく、学校教育の重点項目として民謡が取り上げられたことをさしていると考えられる。伝統芸能の伝承は保存会にとっての死活問題であり、学校と提携するようになったことで、ほとんどの子どもたちが民謡をすることが当然であると考えられるようになったと思われる。また、下線部⑤のように、前述し子どもたちの減少にともなって、すべての子どもたちに民謡を身につけさせなければならない必要があった。そのためにも、学校のなかで民謡を学ぶことが必要になったと考えられる。民謡はその住居する地域によって様々であるが、学校へ指導者を呼んだり、下線部③のように子どもたちを指導する時間を確保することによって、居住地に関係なく多くの民謡を学ぶことが可能になる。しかし、教員の側から子どもたちのなかに民謡に対して積極的でない子どももいることが伺えた。教員の目から見ても、子どもたちのなかに民謡に対して積極的に取り組むことのできない子どもたちが存在するのである。

次に、なぜ保存会は民謡を子どもたちに教えるようになったのかについて見ていきたい。

【事例3 Cさん 60代 女性 民謡保存会所属】

質 問：保存会の方が子どもたちに踊りを教えるようになったのはなぜですか。

Cさん：やっぱり、都会から人がやってきてから⑦だと思うわ。踊りに変化が出てきて。お嫁にやってきた人が踊れないし、民謡離れしてるから、子どもに上手く踊りが伝わらないの。それで、「これは本気にならないと民謡がなくなるな」って思ったの。

質 問：それは大体いつ頃のお話ですか。

Cさん：私たちが子どもたちを教えるようになったのは昭和50年代くらいから⑧ね。高校に郷土芸能部ができたのも同じくらいだったと思うわ。

保存会の方の話では、下線部⑦のように他の地域から人がやってきたことによって、民謡を踊れなかったり、興味が湧かなかつたりする子どもたちが出てきたと述べている。それまで、険しい山岳地帯にあった五箇山地方は、他の町へ行く交通手段が限定されており、他の地域から隔絶されていた。それがこの地方の独自性を保持していたともいえるのであり、当時、この地方に在住する人々は誰でも民謡を歌い、踊ることができたのである。しかし、山岳地帯をつきぬけるトンネルが完成し、他の地域から人が流入するにしたがって、民謡に対する住民の考え方に変化が生まれてきたのである。他の地域からやってきた人間の民謡に対する意識は、以前から五箇山地方に在住している人間のそれより低くならざるを得ない。そのような家庭で生まれ育った子どもたちのなかに民謡を踊れない子どもが出てきたのである。民謡を踊れない子どもに対して危機感をもった保存会は、有志で子どもたちに民謡を教えるようになったのである。そして、子どもたちに民謡を教えるようになったのは下線部⑧のように20年以上も前からであるとのことだった。これは、前述したトンネルが完成された時期と一致している。このように、民謡を指導する技術は学校へ保存会が教えに行く以前から構築されているといえるだろう。子どもたちに民謡を教えるカリキュラムは保存会のなかで確立されている。以前は地域のなかで教えられていた民謡は、学校教育との連携により、学校のなかで伝達されるようになったのである。

以上のように、学校と保存会との連携が密接であるこの民謡を取り入れた学習に対して、子どもたちはどのように考えているのであろうか。前述した教員の話では、子どもたちのなかに積極的に民謡を学習する子どもとあまり積極的に民謡を学習しない子どもがいることがわかった。ここでは、その両方に対してインタビューをおこない、彼らの考え方の違いについて見ていきたい。

【事例4 Dさん 中学2年生 男性】

質 問：何か郷土芸能に関する活動をされていますか。

Dさん：民謡とこきりこをやっています。

質 問：やっていますか。

Dさん：面白い。

質 問：やっていますいやだなと思うことはありましたか。

Dさん：いやと思ったことはないです。

質 問：これからも続けていこうと思いますか。

Dさん：はい、続けていきたい⑨と思っています。

【事例5 Eさん 中学2年生 女性】

質 問：郷土芸能に関する活動は何かされていますか。

Dさん：民謡です。

質 問：やっていますか。

Dさん：楽しいです。

質 問：やっていない子に対してはどう思いますか。

Dさん：（やっていない子は）ほとんどいないと思う。やってないと変な目でみられるし。

質 問：授業のなかで郷土芸能をやることにに対してどう思いますか。

Dさん：やりたくないとは思わないけど…⑩。

質 問：これからも続けていきたいと思っていますか。

Dさん：……わかりません⑪。

【事例6 Fさん 中学3年生 女性】

質 問：郷土芸能に関する活動をされていますか。

Fさん：三味線です。あとは踊りもやっています。

質 問：これからも続けていきたいと思いますか。

Fさん：続けない⑫と思う。

質 問：どうしてですか。

Fさん：……将来ここに住んでたら続けるかもしれない⑬けど。

質 問：将来はここに戻ってきたいと思いますか。

Fさん：まだ先のことだしわかりません。

【事例7 Gさん 高校3年生 女性】

質 問：パートを教えてください。



Gさん：歌です。

質 問：なぜ、郷土芸能部に入部したのですか。

Gさん：昔から（他の人がやっているのを）見てていいなと思って。うちは4人兄弟やけど、兄弟みんなやってたし、自分も自然に入ってた<sup>⑭</sup>。あと、やっという方が高校3年間を濃くできるっていうか。

質 問：部を辞めたい、と考えたことがありましたか。

Gさん：うーん、それはないかな。練習はきついけど（笑）。

質 問：小さい頃から踊っていて、嫌だと感じたことはありましたか。

Gさん：（即答で）全然ない<sup>⑮</sup>。これが当たり前やし。

質 問：それでは、これから民謡をやりたいと考えていますか。

Gさん：私は地元の学校に進学するとおもうから保存会のほうに入るし、続けるかな。

ここでは、子どもたちの意見がはっきりと分かれていることがわかる。事例3のDさんは下線部⑨のように民謡を将来もやりたいと述べている。同様に、事例7のGさんも下線部⑭や⑮のように民謡をすることが嫌になったことはなく、民謡をすることは自然なことでそれに対して疑問や不満を感じたことはない、といった様子であった。民謡の練習は中学・高校ともにパートごとに分かれておこなわれ、最終的に踊りと音楽をあわせていた。この練習でもDさんやGさんはきびきびとした動きで練習に参加していた。民謡を継続したいと述べた彼らは学校や地域住民が望む子どもであるといえるだろう。しかし、その一方で、事例4のEさんや事例5のFさんのように、民謡を継続していきたいか、という質問に対して、下線部⑪や⑫のように答えに窮したり、はっきりと「続けない」という意志をもっている子どもたちも存在していた。Eさんは民謡を「楽しい」というが、授業で民謡をすることに対しては下線部⑩のように答えることをためらった。これは、授業で民謡をおこなうことに不満をもっているともいえないだろうか。両者に共通して見られたことは、村や郷土芸能に対し誇りをもっているとは言い切れないということであった。彼女たちは民謡や地元に対して、受け入れることが難しいと感じているようであった。「他の子がやっている」「やらないと変な目で見られる」というように、外部からの強制により民謡をやらされている、という思いがインタビューに表れていると考えられる。

したがって、仮説である「平村の子どもたちは、教員や地域住民が望む民謡の考え方をもっていないのではないか」は一部の子どもたちに対して実証されたといえる。なぜなら、教員や地域住民が望むように、将来も民謡をしたいという子どもがいる一方で、将来民謡をしたいとは言わない、または「続けない」とはっきりと口にする子どもがいるということは、本来の学校教育で民謡が取り扱われた目的である郷土に対する愛着が湧いているとは考えにくいからである。原が前述した「文化の内面化」に対する影響として、子どもたちの民謡に対する考え方

は変化しているといえるだろう。すなわち、民謡を続けることが当たり前であるとする子どもとそう考えない子どもとの二極化である。文化の継承が二極化されたように、子どもたちの内面化も二極化していると考えられるのである。

#### Ⅳ. まとめ

本研究では、学校教育でおこなわれる民謡の時間の効果について考察してきた。この地方の学校では少子化とそれにとまなう民謡の伝承の必要性から学校教育のなかに民謡を取り入れてきた。それは学校側が主体としておこなうものではなく、地域の保存会が率先しておこない、教員は生徒の引率や、時には生徒とともに学習者として民謡を学んでいた。したがって、ここでは、学校と地域との連携が進んでいるといえるだろう。それは「これまで教師の「聖域」だった学校や学級に他者が入り込むことを前提とする発想」<sup>(5)</sup>であり、新しい学校のあり方を示しているといえる。しかし、それは学習する側の子どもたちを民謡に対する考え方を二極化していると考えられる。子どもたちが内面化する民謡は「自然なもの」と「やらされているもの」という考え方に分かれてしまっているのである。

以上にみてきたように、本来、地域が伝達を担っていた民謡を学校教育でおこなうことにより、民謡を自分のなかに取り入れない子どもたちが一部において現れている。「このままでは民謡の担い手がいなくなってしまう」という問題意識から始まったこの学習活動は思わぬ副作用を生み出した。したがって、この副作用を静めるためには、また新しい学習方法を見出さなくてはならないだろう。このまま学校教育で民謡を続けるだけでは、地域社会から取りのこされる子どもを生み出しているともいえる。多様な学びを創造しつづけることが、現代の教育において必要となるといえるだろう。

#### 〔注〕

- (1) 佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』岩波ブックレット 2000 pp.57～60
- (2) 原清治「地域の特性を生かした生涯学習コミュニティの構築に関する研究」『佛教大学教育学部論集 第14号』 2003 p.92
- (3) 藤田智之「生涯学習コミュニティにおける青少年の国際化に関する調査意識」『関西教育学部学会紀要 第26号』 2002
- (4) 原、前掲書、pp.20-25
- (5) 原清治「現代社会の教育的諸問題と教職の課題」教職問題研究会編『教職論』、ミネルヴァ書房、2000 p.31

〔参考文献〕

- 牧昌見編『教職「大変な時代」』教育開発研究所 1997
- 高浦勝義『総合学習の理論・実践・評価』黎明書房 1998
- 教職問題研究会編『教科外教育理論と実践Q & A』ミネルヴァ書房 2002
- 教職問題研究会編『教職論』ミネルヴァ書房 2001
- 加藤幸次・河合剛英編『多様化へ対応する授業－実践の工夫と技術－』教育開発研究所 1998
- 稲垣忠彦『総合学習を創る』岩波書店 2000
- 佐藤学『教育改革をデザインする』岩波書店 1999
- 佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』岩波ブックレット 2000
- 原清治「地域の特性を生かした生涯学習コミュニティの構築に関する研究」『佛教大学教育学部論集第14号』 2003
- 藤田智之「生涯学習コミュニティにおける青少年の国際化に関する調査意識」『関西教育学部学会紀要第26号』 2002

(やまさき ひとみ 教育学研究科生涯教育専攻修士課程修了)

(指導：原 清治 助教授)

2004年10月15日受理